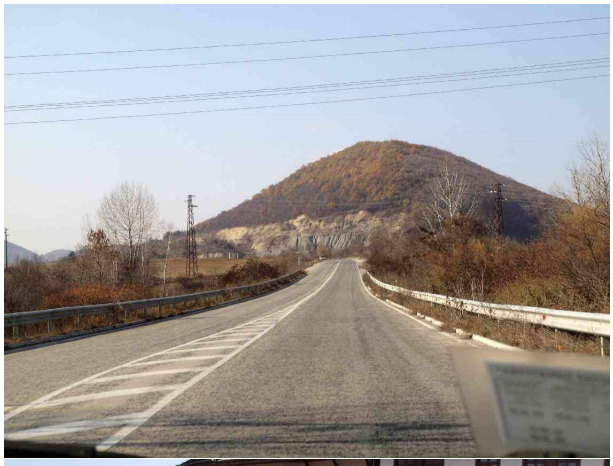
８．トリャヴナ(Трявна)

宿探し

次の目的地、トリャヴナはアルバナシから車で行けば50キロ弱だけれど、公共交通機関で移動しようとすれば、ヴェリコ・タルノヴォまでバスで行き、鉄道駅まで歩くか市内路線バス。そこから鉄道利用になる。不便だし連絡状況も把握できないから、安価なブルガリアのタクシーを利用しないで頑張るほどの根性はなかった。

5分ほどの待ちでタクシーが到着した。今回も軽自動車並みだが不満はない。運転手は小太りで陽気なオヤジだ。英語はほとんどしゃべれないようだが、気にする様子もなくカタコト英語とブルガリア語で話しかけてくる。

荷物をトランクにしまってもらい、助手席に乗り込んだ。ヴェリコ・タルノヴォ経由かと思っていたが、東に向かい数キロ先で高速道路へ乗り入れる。パトカーを見かけると、そのときだけ片手でシートベルト着装の見かけにしたり、急に減速して、(多分)「この付近は無人カメラで速度違反を取り締まっている。」などと教えてくれた。



上：E85号線。下：トリャブナ到着後タクシーと運転手。

天候にも恵まれ快適なドライブを楽しむ。幹線道路でトリャブナまで行くのかと思っていたが、なぜか途中から細い道路になり、挙げ句の果ては沿道の住民に道を尋ねていた。いつもならばタクシー代が増えないかやきもきするところだが、ブルガリアならば高がしれていると、大船に乗った気分で変化を堪能する。

結局1時間ほどでトリャブナ市街に入り、街の中心部とおぼしきところに駐車した。後で判ったことだが、鉄道駅のそばだった。しかし日ガイドの地図は時計塔のあるディヤド・ニコラ広場が中心で、英ガイドには地図がない。幸い日ガイドには時計塔を背景にした広場の写真があり、これを彼に渡すと、付近で客待ちをしている地元のタクシー運転手に訊きに行った。

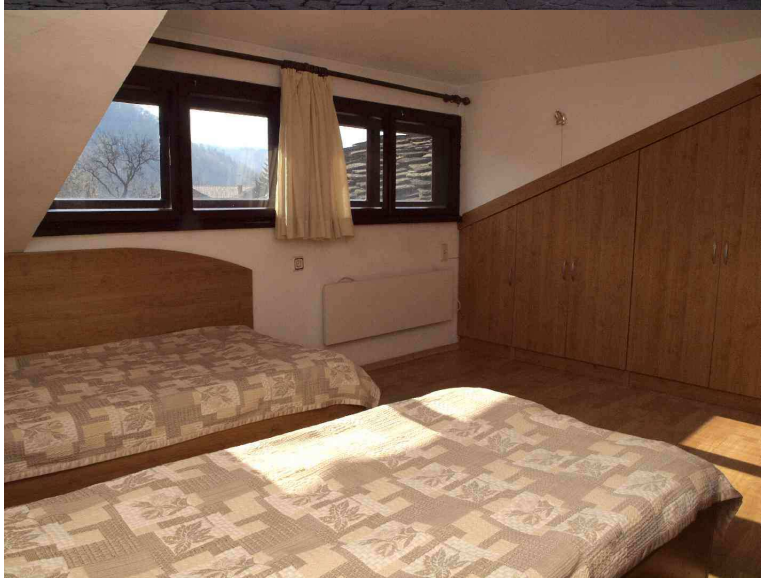
この作戦は成功で、すぐに戻って車を発進させる。1キロほど走ったところに車止めがあり、その先に広場と時計塔が見えた。

タクシーメーターは39.XXだったので、１０％をチップとして４５Lv(2,471円)支払った。ついでに運転手を車の脇に立たせて二枚撮影。

これまでの宿は全て予約して街へ入ったが、今回は予約なしだ。見てから宿を決めたい気持ちと、街の規模が小さいし、そして時間に余裕があり天候がよいことがこれを可能にした。

ディヤド・ニコラ広場。

トリャヴナ市街平面図



上：ディヤド・ニコラ広場とは逆側から見たゾグラフ・インの外観。左部分に古橋と時計塔が見える。下：泊まった部屋。

日ガイドの地図を見れば一番近いのはゾグラフ・インで、英ガイドの評価も良いところだ。キャリーカートを引っ張って広場に隣接する古橋まで行くと、橋の向こうに石屋根の重厚な建物がある。泊まってみたいと思わせるところだ。

玄関を入るとフロントはなく、右手にガラスで仕切られた、博物館の入場券売場を彷彿させる小部屋があり、オバサンが一人坐っていた。泊まれるとの話で、部屋を下見させて貰う。彼女は出てくると小部屋に施錠し、旧館と新館のどちらがよいか尋ねる。もちろん旧館だ。

そのまま階段を上がって最上階の三階へ行く。建物の裏手に面した部屋は、屋根裏部屋で多少天井が低いけれど、それほど圧迫感はなく、頭をぶつける心配などはさらにない。窓辺に寄ると眼下にトレヴネンス川のせせらぎ、遠景には樹々に覆われた周囲の山麓と、長閑な眺めだ。

気に入って泊まろうと思ったが、一応料金を訊く。一泊31Lv(1,703円)と云われた。英ガイドには38Lvで、週末は若干高くなると記載されていた。週末加算とシーズンオフ割引の結果が31Lvなのだろうか。ともかく安いことは有り難い。

トリャヴナ探訪

部屋に荷物を収め、一休み。しかしすぐに街へ出かけた。好天気だったので、逆にこれを逃して後で悔しい思いをするのを避けたかった。宿を出て先ほど広場から辿って来たスラヴィコフ通りを、さらに進んでみる。土産物屋や

宿のすぐ隣にあった土産物屋。二階に居住しているようだが、それにしては羽目板の痛み方が甚だしい。

観光客相手の飲食店が軒を連ねていた。

数百メートルで街外れになり、一応この方面は切り上げて踵を返す。昼飯に適当な食堂はないか、物色しながら戻った。通りは石畳舗装で両脇に並ぶ建物は築100年を越えるようなものがかなりありそうだ。雰囲気の良さそうな店は多いものの、同時に観光客相手の営業だということがあからさまで腰が引けてしまう。ともかく一通り見ながらディヤド・ニコラ広場まで戻った。

広場の片隅にはかき寄せられた残雪が30センチくらいの堆積を作っている。ヴェリコ・タルノヴォで一昨日降った雨はこちらだと雪だったのか。この辺りの標高はタルノヴォに比べ300メートルばかり高いだけなのに。

宿のほぼ前から見る時計塔とトレヴネンス川に架かる古橋。

広場周辺には時計塔と対角線上に大天使ミカエル教会がある。創建はこの街で一番古く、中世に遡るらしいが、18世紀にトルコ人により焼き払われ、現在の建物は1819年に建造された。

大天使ミカエル教会のイコン博物館所蔵品。

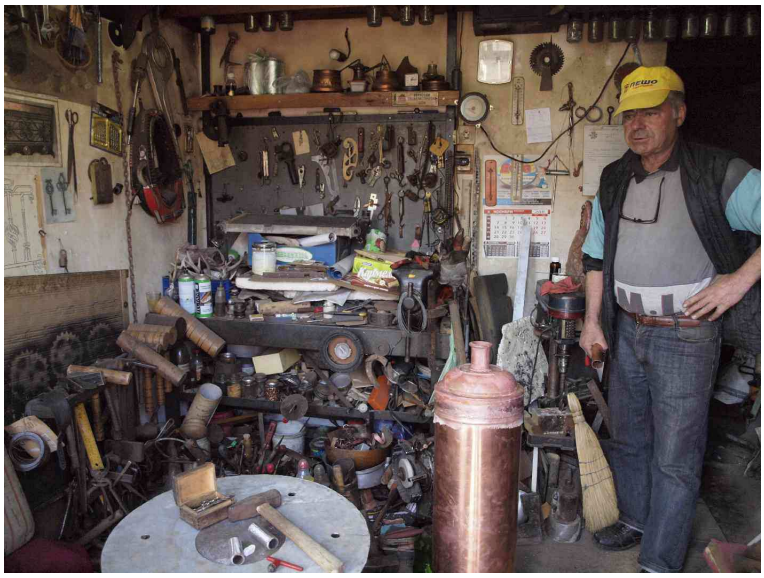
信仰の場として現役なので入場料などはないが、写真撮影をする場合は10Lv(549円)収める。トリャヴナは木彫り制作で有名らしいが、この教会のイコノスタシスも手が込んだ木彫に飾られたイコンが並んでいる。

ディヤド・ニコラ広場。左手の建物が学校博物館。奥に大天使ミカエル教会とその鐘楼。

2階はこぢんまりしたものではあるが、イコン博物館になっていた。しばらく見物したものの、やはりイコンにはあまり興味を持てなかった。結局15分ほど見物した後に退去する。

教会の西北側は通り一本を隔ててライコフ・ハウス(ブルガリアの最初の化学者ペンチョ・ニコロフ・ライコフが生まれた家)があり、一階部分は間口3メートルぐらいの革製品などの工房が並び、製品を直売している。一番外れに無骨な工具類が垣間見える一角があった。覗

大天使ミカエル教会のイコノスタシス。



オートバイ修理工房。この写真を後日エアメールした。

ゾグラフ・メハナの店内。

いてみると、オートバイなどの修理工房らしい。オヤジが愛想良くブルガリア語で（多分）、「見てゆけ。」と云う。無下にするのも悪いから中に入り数枚撮影。帰国後エアメールで送った。

大体街の雰囲気はつかめたと思う。見所としてはハウス・ミュージアムがいくつかあるけれど、明日一日が空いているから、急ぐ必要は無いというか、焦って廻ってしまうと明日することがなくなる。

1時半近かったので昼食を摂ることにした。宿の地下にあるゾグラフ・メハナは英ガイドのお奨めでもある。ホテルのレストランは一般的に郷土色がなくてつまらないが、旅籠の食堂ならば期待もできよう。少なくとも昨日のアルバートは当たりだった。

玄関から入り階段を降りる。宿の裏手は一段低くなり、トレヴネンス川河畔テラス席となり、食堂の奥に設けられたドアで繋がっている。暖かい時期にはそちらでも食事できるらしいが、晩秋の今は閉ざされていた。時分どきなのに先客は中年の男女が一組だけだった。

ネエチャン風のウェイトレスがお品書きを持ってきた。ブルガリア語と英語が併記で、使用材料も記載されている。サラダ類のトップはサラダ・ゾグラフで、素材は焼きマッシュルーム、インゲン豆、ペッパー風味オニオン、ドライ・ヨーグルトだ。面白そうなものと思う。

肉料理類のトップは、「旅籠の鉄串（tavern sword）」。料金が18Lv(989円)と、このグループでは一番高い。串焼きかと想像したが、ウェイトレスに訊いてみた。しかし彼女はさっぱり英語を話さない。それでも奥へ行き、多少はしゃべれるウェイターを替わりによこした。

小柄で、この職種には不似合いな目つきの鋭い男だが、別に不穏な雰囲気があるわけではない。彼の英語力、そしてこちらの理解力の両方に不足があったが、ともかく概ね想像していたような料理らしい。これとサラダ・ゾグラフに、ワインはミンコフ・ブラザース社の赤。全然判らないまま値段で選んだ。

サラダが出て来るまで15分ほど待たされた。しかしそれぐらいが良かったのかもしれない。串焼きはそれからさらに半時間かかったから、サラダが早ければ間が持たなかっただろう。

このサラダにしたのはドライ・ヨーグルトがどんなものか興味を惹かれたことにもよる。酸味の利いたクリームチーズのような味わいで、ドレッシング替わりになる。ともかくこのサラダでワインを飲みながら、串焼きを待った。

サラダ・ゾグラフ。

旅籠の鉄串と名付けられた串焼き。

串焼きのばらし。

他に訪れる客もないまま、ウェイトレスは壁際で手持ちぶさたな様子だったが、やおらタバコを取り出して吸い始めた。給仕者が客席でタバコを吸うなど、日本では考えられないことだけれど、ブルガスでも見かけたことだし、ブルガリアでは珍しくないらしい。嘆かわしいことだ。

そのうち女子高校生が5人、階段を降りてきた。しかし食事はせずに飲み物だけを注文し、陽気におしゃべりを楽しんでいた。

ようやく串焼きが登場する。付け合わせを載せた皿とは別に、全長80センチほどの金串に肉と野菜が刺し貫かれたたものを片手に掲げてテーブルに来る。食べやすいように、テーブルで皿の上に並べてくれるが、串から抜く前に一枚撮影させて貰った。

この手の料理は、見かけからつい過剰な期待をしてガッカリすることが多いけれど、今回は美味いと思った。時間をかけてじっくり遠火の強火で焼き上げたためか、はたまた長時間待たされた間に増強された食欲によるのか、最後は量の多さに喘ぎつつも満足の昼食だった。

1時間半近くに及ぶ食事を終え、勘定は、赤ワイン1本26Lv(1,428円)、串焼き18Lv(989円)、サラダ5Lv(275円)。表玄関のガラスには各種カード会社のステッカーが貼ってありながら、カードでの支払は受け付けないという。そのこと自体は構わなかったが、けんもほろろな云い方が不愉快だった。

そのまま部屋へ戻りゆっくり昼寝する。4時に目を覚まし、しばらく部屋でのんびり過ごした。

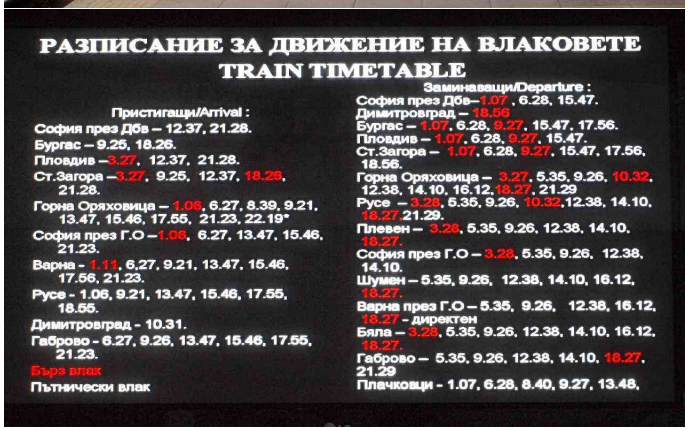
上：革命家アンゲル・カンチェフの生家。現在はハウスミュージアム。下：街中を現役の馬車が走る。

列車運行ダイヤ調査

4時半に外出する。街を見物しながら、駅までの道筋を確かめ、明後日に行こうかと考えているカザンラクへの列車も調べるつもりだ。この街にも観光案内所がある。英ガイドによれば土日は休みで、ディヤド・ニコラ広場のすぐそばだから念のため足を運んでみたが、やはり閉まっていた。

駅を目指してアンゲル・カンチェフ通りを北東へ進む。途中に築100年以上とおぼしい風格のある木造二階建てがあった。近寄ってみると現在はハウスミュージアムとして公開されているアンゲル・カンチェフの生家だった。料金は1Lv(55円)と安価だったが、興味が湧かずに外観だけを撮影して通り過ぎる。

先ほどタクシーの運ちゃんがディヤド・ニコラ広場を訊いた場所は、長距離バスのターミナルに隣接し、駅もそのすぐ先にあった。地元タクシーが客待ちしていたのも納得が行く。



上：トリャヴナ駅。右側が駅舎。下：駅のコンコースにある時刻表液晶表示。英語は TRAIN TIMETABLE Arival Deperture しかなく、地名（駅名）が全てキリル文字。

駅の待合室には灯りが点り、切符売り場にはオバサンの姿も見える。時刻表を探したが紙のものはなく、高い位置に液晶表示のものがあった。駅名が全てキリル文字なのでそのまま読むことはできない。

数字を頼りに推理していると、画面がコマーシャルなのか画像に切り替わってしまい、しばらく待たないと時刻表にならない。これを数回繰り返して何とか手掛かりを掴もうとしたが、結局この方法は徒労だろうと諦める。

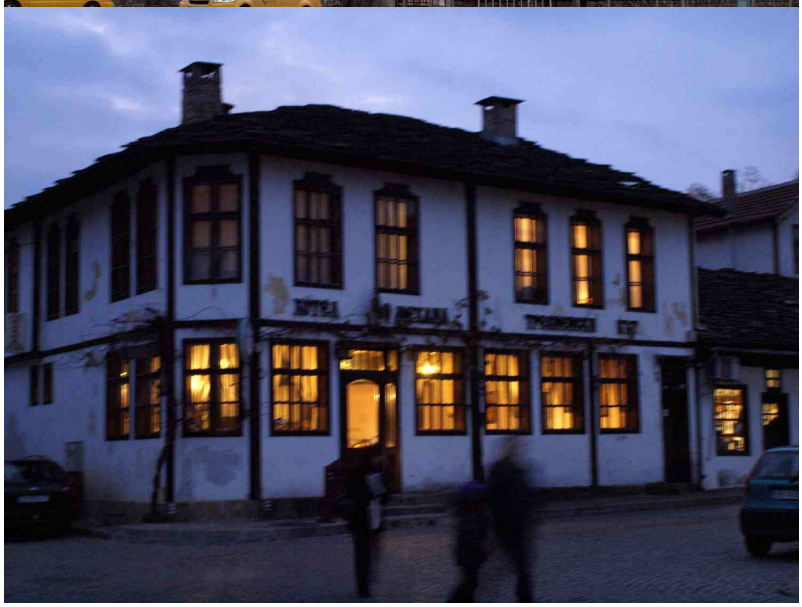
切符売り場のオバサンに訊いてみるが、英語がさっぱり通じない。駅長室らしいところを見付けて、かなり強引と思いつつもこちらへ入り込む。英語が通じないのは同じ事だが、一計を案じて、筆談を試みた。Tryavna→Kazanlâk とこれまではよいが、明後日であることを表現するのに、苦し紛れだが Nov. 14 とし、これを紙に書いて差し出す。

ともかく反応はあり、15．47　17．54 と書いてくれた。午後3時47分、5時54分ということだろう。しかし本数が少なすぎる。明日は日曜日で減便が予想されるから、明後日ではなく明日の便を書いてくれたらしい。しかしもう少しねばってみたものの、こちらの考えていることを伝えられなかった。

黄昏れる街を歩く。此処に限ったことではないが、旅先で穏やかに暮れてゆく風景は味わい深い。英ガイド情報にもとづきインターネットカフェを探すが駄目だった。

宿のそばまで戻り、食料品店でウォッカ700cc8.45Lv(464円)、ミルク1㍑1.9Lv(104円)。その他トマト一個、ポテトチップ70㌘、ソーセージなども買って、合計14.06Lv(772円)だった。

夜になると宿は全くの静寂に包まれる。昼間でも車輌は通行しないが、往来からの人声も聞こえないし、同じ階に宿泊する人もいないようだ。



上：聖ゲオルギ教会。5時1分。下：ディヤド・ニコラ広場に面した食堂。5時20分。

トリャヴナ彷徨

朝、目を覚まし窓際から表の様子を窺う。曇り空だが取り敢えず降る様子もない。肌寒く感じ、温度計を見ると17℃だった。部屋の暖房は電熱対流式なので音はしないが能力不足のようだ。

8時半に朝食のため下へ降りる。フロント替わりのガラスで仕切られた小部屋にいるオバサン(昨日とは別人)から朝食券を貰い、一階のカフェで食事するシステムだ。旅籠と、地下食堂及びカフェは名前こそゾグラフで共通だが経営が違うのかもしれない。それにしてもチェックイン時に朝食券を一括して渡さない意味が判らなかった。

カフェにはウェイトレスが一人と、昨日の昼には食堂にいたウェイターがいた。ミルクコーヒーはすぐ給仕されたが、それから15分ぐらい待たされて、ようやくトースト2枚、ハムとチーズの厚切りが出てきた。なんでれほどかかるのか理解できない。食後は部屋で「隠れていた宇宙」を読む。読書にも倦んだ9時半、散歩に出かけた。

トレヴネンス川に架かる石積みの古い橋。

木々の枝が折れているのを散見する。降雪のためだろうか。ディヤド・ニコラ広場からアンゲル・カンチェフ通りを駅の方へ辿り、途中から左折してトレヴネンス川の河畔にでた。広場から宿への行き来で渡る、石積みの橋がどんな形なのか横から眺めたかったためだ。

川沿いに石畳の歩道が続き、沿道の建物はどれも築100年以上に見える。カフェーになっているところもあり、雰囲気は申し分ないが、歩き始めたばかりなので取り敢えず素通りした。

橋を間近に見てやはり美しいと思う。後で入手した市街観光案内には、1844年に作られたと記載されていた。橋の10メートルほど手前で、川沿い遊歩道は終わるが、左手に階段があり、ディヤド広場に繋がっていた。

学校博物館。建物内部は撮影禁止だった。

広場の北東に面して学校博物館がある。1839年に開校した世俗的な学校の一つで、聖職者養成を目的とせず、庶民の子弟を教育した。この類の学校としてはブルガリア最古だという。

博物館に興味はなかったものの、一応見物する。入場料は2Lv(110円)で、内部は撮影禁止だ。しかし展示されているものや、学校の様子などを見ても、撮影したい気もおこらなかった。

石葺き屋根のあれこれ.

ウィキペディアによると、「オスマン帝国支配時代、地元の住民らは山道を守り、その見返りに特権を与えられていた。町にはブルガリア人のみが住んでおり、トルコ人は入ることができなかった。」と記載されている。この街が独特の雰囲気を湛えているのはそんな歴史によるのだろうか。

しかし歴史とは直接関係なさそうなところで景観に大きく影響しているのが石葺き屋根だ。街の至る所に見られ、大天使ミカエル教会や聖ゲオルギ教会、学校博物館など、そして旅籠ゾグラフもそうだった。

石屋根に使用される石板の寸法は縦横60センチで厚さ5センチ程度なので、比重を2.7とすれば、1枚の重量は50キロ近くなる。これだけの重量物を高所に運び上げて葺くのも大変な作業だろうし、屋根自体の構造も頑丈に造らなければならない。

多分そんな訳で他所では見かけることがほとんどないのに、この街で旧い建物だと多数派になる。理由としては良質な材料を比較的容易に入手可能であったことがありそうだが、それだけでは理解できなかった。

僅かに小雪が舞う。歩き廻った結論はこの街には奥行きがなく、魅力的なのはスラヴィコフ通りで、それに次ぐとすればアンゲル・カンチェフ通り。しかしこの通りを外れてしまうとほとんど見るべきものも雰囲気も失われ、彷徨い歩く楽しみはない。

ということでスラヴィコフ通りに戻り、クラフトショップなどを覗いてみた。カウベルに若干食指が動く。自宅の玄関ベル、または門扉ベルに使おうかと思った。しかし魅力が今ひとつなのと、これから二週間以上旅が続くことを考えると、結局買わずに店を出る。

スラヴィコフ通りを行きつ戻りつしたが、観光客風が多い。「シーズンオフにもかかわらず、この人出は余程人気があるのか？」などと思ったが、考えてみれば日曜日だった。2時間ほどで彷徨を切り上げ宿へ戻る。

スラヴィコフ通りのアンティークショップ。ちょっと気を惹かれたが、結局入店しなかった

上左：マッシュルームスープ。上右：ショプスカサラダ。供されたときはチーズで覆われ真っ白に近かった。これは混ぜ合わせた後。下：レバーのシチュー。

再び「隠れていた宇宙」を読み時を過ごす。12時半になり食事に出かけた。地下のゾグラフ・メハナは料理や雰囲気に不満はないが、ウェイターが不愉快だし、ウェイトレスがタバコを吸うのも嫌だった。

替わりに向かったのは、これも英ガイドの推奨するゴステルニッア・バラバノヴァタ・クシュタだ。英ガイドにこの街の市街平面図がないのでどこにあるのか困惑したが、住所がスラヴィコフ通りなので、短い通りでもあり番地で探し出すことができた。先ほどの散策時に店の外観も確認し、期待できそうだと思ったところだ。

ゴステルニッアもゾグラフ同様旅籠だけれど、対称的に二階が食堂だった。かなり混雑しているが、これは日曜日のせいかもしれない。英文併記メニューで無難なショプスカサラダと、材料だけに着目してレバー料理。ワインはロビコの赤、値段で選択はいつもの通りだ。執筆にあたり調べると、トリャヴナから西北に30キロほど行ったところにあるワイナリーだった。

ダスカロフ・ハウスに展示されていた木彫。

スープ、そしてサラダは期待通りの、美味いけれども特別何ということはなかった。レバー料理は煮込みというかシチューというのが適切か、味わいの良さはさることながら、一度自作してみたくなる料理だった。

40分ほどで昼食を終える。店内はだいぶ空いてきた。地元の人は長居し、他所からの訪問者はそそくさと食事するような印象を受ける。勘定はワイン1本11Lv(604円)、レバーシチュー4Lv(220円)、スープ1.5Lv(82円)、サラダ3.9Lv(214円)。合計で20.4Lv(1,120円)は、酒を飲んでの昼飯としては格安だと思う。3Lv(165円)をテーブルに置いた。

食堂を出て、ほとんど隣にあるダスカロフ・ハウスを見物する。先ほども訪れたが、庭と建物を見ただけで踵を返していた。改めて入場料2Lv(110円)を支払い邸内に入る。

トリャブナは周辺で良質の木材がされるためか、木彫とイコン製作で有名らしい。邸内にも歴代皇帝像などの木彫作品が展示されているが、見て面白いものではなかった。ちなみに私の母は趣味で長年木彫をやっていたから、そんな人が見ればあれこれ興味深いのかもしれない。

ダスカロフ・ハウスを出て、鉄道駅のすぐそばにあるバスステー

バスステーションのそばで会ったワンコ。野良らしいが気立ての良い子だった。

ションを情報収集に訪れる。本当に明日、列車が午後の二便しかないならばバスによる移動がましかもしれない。

相変わらずキリル文字問題で時刻表が読めずに困惑する。突然声をかけてきたのはオランダ人で、後で判ったことだが、この街にペンションを所有しているらしい。彼の助けで、カザンラクへ行くにはガブロヴォで乗り換えることと、ガブロヴォ行きの時刻表も判った。半時間に1本程度の便があるものの、乗り継ぎがどうなるかまでの情報は得られない。

それ以上行くべき場所も思いつかず、寒さも身に染みてきたので宿へ帰る。多分、長期間利用者もないまま冷え切っていた部屋が、昨日からスイッチを入れっぱなしで暖房を続けたせいか、ようやく室温が20℃に達していた。

朝食のパンケーキ。焼きたてが美味かった。

９．カザンラク(Казанлък)

バスの乗り継ぎ

14日の朝食時、カフェに地元の常連らしい連中が15、6人たむろしていた、オヤジ達がほとんどだが、オバサンも二人ほど。彼等は食事ではなく、コーヒーを飲みながら、新聞を読んだり談笑したりで、ほとんどがタバコを吸う。部屋の広さは20坪ぐらいあるのが救いで、なるべく離れたテーブルを利用した。

ちなみにカフェの往来に面した入り口にはわざわざ喫煙可のマークが貼り付けてある。こんなマークなしでもところ構わずタバコを吸う連中がやたら多いのに、どんな意味があるのだろうか。まさか、「非喫煙者は入るな。」とも思えないけれど。

朝食はパンケーキとフェタが1枚。連泊者に対して変化を付けてくれたのか、良く判らなかったが、ともかく焼きたての熱々は美味かった。

喫煙マーク。

この日はカザンラク(トリャヴナの南方約30キロ)へ移動する予定だ。バスで移動するつもりだが、昨日の情報では不足なので、9時を廻ったところで観光案内所を訪ねた。二人いたオバサンはどちらも流暢な英語を話し、親切だった。

一応、鉄道から訊いてみる。PCの前に座っていたオバサンがすぐブルガリア国鉄のホームページにアクセスし、一枚印刷するとキリル文字で印字されているものに必要な箇所を手書きしながら説明してくれる。やはり午前中に三便あり、9時半発はほぼ理想的な出発・到着時刻であった